第三章　サンジカリズム批判と、全国自由聯合の分裂、アナキズム都市労働運動の衰退

一　農青イズムの特質とその成因、スペインとソヴェトのサンジカリズム

農青イズムが農村を基盤とするアナキズム革命運動であることは第一章で詳述した。農村を基盤としたことについて、都市アナキズム運動を無視した偏向であるという批判が加えられた（第八章参照）。だが、そのことは第一章で明確に述べたように、農青イズムが農村と農民とに基盤をおいたことは、偏向ではなく、それは意識的であり、根拠を有する。それは再言を必要としないだろう。

言うまでもなく、当時、サンジカリズム論争の結果、都市労働運動は衰退し、その衰退の具体的事例として自聯系芝浦労働組合の瓦解事情を例示した。農青運動がこのように萎縮した都市労働運動の支持をもとめることは、事実として期待できなかったし、むしろ、かれらは前述のように敵対行動を農青運動に対してとった。そればかりでなく、都市においては、依然として、アナルコ・サンジカリズム問題が、アナキズム戦線の内部で紛糾しつづけていた状況であった。

しかし、農青運動が農民を基盤とすると言っても、運動実践としては、地方都市在住のアナキストは、農青運動に緊密に協力されたことは言うまでもない。

一般的に言って、アナルコ・サンジカリズム問題は、アナキズム戦線内における派閥論争ではなかった。1917年ロシア革命当初においては、大杉はじめ、アナもサンジカリストもボルも全ての労働者は同志であった。併し大正十一年1922年における全国労働者総聯合

の実現などは以下のコミンテルンテーゼを検討すれば、そうしたものの実現はナンセンスであったが、テーゼの知識不足と、経済恐慌の客観情勢から労働者の総聯合の成立が有りうるとされた。このことはアナキズム運動の内部についても言えることで、たとえば八太は、昭和二年1927一月から十月までは「労働運動」に毎号寄稿しているが、実際は同誌は、アナルコ・サンジカリストの近藤憲二によって刊行されていたのである。この混淆について、最初に攻撃をしかけてきたのは前掲のごとく延島英一（および石川三四郎）である。八太の「サンジカリズムの検討」は昭和二年1927十月に刊行され、これが両派抗争の端緒という見方は誤まっている。

それから今ひとつ、この抗争は両派のヘゲモニーをめぐる抗争ではないということを知るべきである。根本的には、これは、当時の日本における社会革命の接近と、ロシア革命によって得られた教訓から、アナルコ・サンジカリズムを正しく批判することが必要であり、アナキズムとアナルコ・サンジカリズムの異同を検討するという真面目な動機から出た。（大正十年1921. 中国ＡＦ（アナキスト聯盟）の黄凌霜に対し「日本における労働運動はサンジカリズムである」と山鹿泰治は説明している）。しかし、右の批判は期待した方向から逸脱した。

サンジカリズムについては第二項で述べるので、ここではこれ以上言及しない。ただ、これに関連して、労働組合、ないしサンジカリズムが、ソヴェトとスペインにおいてどう扱われたかを、前記の趣旨の一部として言及したい。サンジカリズムが不可避的に抱懐する経済主義について、1927年テーゼは「労働者階級の政治的におくれた部分にとっては、日常闘争と経済的衝突過程に提出される具体的要求とが、資本主義的搾取の羈絆よりの不断にして終局的な解放のための闘争をくらませる。この解放はただ革命によってのみ、プロレタリア独裁の樹立によってのみ、可能である。経済主義は労働運動の小児病にして、同時に、最悪の日和見主義である」と規定している。

ソ連の労働組合の歴史において、労働組合が独立した機関であったのは極めて短かく、党の力が充分でなかった1919年三月の党綱領では「社会化された工業の組織的機構は、まず、第一に労働組合を基礎とせねばならぬ。労働組合は経済的単一体としての全国民経済に対する全般的管理を、事実において、その手に集中するまでにならなければならない（ブハリン）」。こうした傾向は1920年八月の、ポーランドにおける運輸部門の軍隊的規律化と鉄道労働組合の規制に対し、組合のこうした政府への従属は、労働組合主義者の希望とは全く対立するものであった。労働人民委員のシュリヤブニコフのことばは、党・ソヴェト（政府）・労働組合の三権分立を主張した。しかし。こうしたサンジカリズム優位の党内論争に対し、レニンは「ロシア共産党は如何なる場合でも、政治的指導のみが党に属し、経済指導が労働組合に属するといったことに同意するわけには絶対いかない。これは破産した第二インターの見解から生れるのである」（レニン、1920年三月）。そして、レニンは、はっきりと「労働組合の権力の確立などというものはサンジカリズムからの密輸品である」と痛罵した。しかし、特に、ウクライナにおいては、全ロシア労働組合中央評議会南部支部は、党内労働組合員の自治に関する決議を通過させ、この決議を第四回党ウクライナ協議会が大多数で可決し、モスクワの第九回党大会1920年四月に付議された。党書記局はこの決議が反革命的傾向であると指摘、党指導部は大会でこの決議を否定した。その結果、サンジカリスト派は労働者反対派を結成、シュリヤブニコフ、ルトヴィノフ、メドヴェデフ、コロンタイなどによって結成され、ロシアの南東部、すなわちドネツ盆地、ドン・ヴォルガ沿岸、一部はモスクワをも獲得した。そして1921年三月まで、労働組合論争は白熱化した。レニンはあくまで「組合は共産主義の学校」であることを固執した。しかし、そのとき、クロンスタットの叛乱（1921年三月）が発生し、労働者農民の蜂起は独裁制を打倒し勤労人民の真の権力のために闘うことを宣言し、ボルシェヴィキ打倒を叫んだ。三月十七日、クロンスタットは敗北し、五月の党大会で、レニンは労働者反対派を革命の脅威として非難し「サンジカリスト的偏向、すなちアナキスト的傾向であり、労働者反対派はプロレタリアの背後に身をかくしている小ブルアナキストである」と言った。そして、結局「党内・ソヴェトの全活動のうちに厳格な規律を打ちたてるため、またあらゆる分派結成を排除して大なる統一を成就するために大会は規律の違反、分派の発生の場合には党からの除名をふくむ処罰の措置をとる」権限が中央委員会に与えられた（ダニエルズ）。要するにアナルコ・サンジカリズムは党とは無縁であるばかりか、党にとって本質的な敵であることが決定された。

スペインにおいてはアナルコ・サンジカリズムが導入されたのは1909年で、アミアン綱領後三年である。1910年十月にはセビル大会で全国労働聯合ＣＮＴが結成された。その母体はカタロニアの労働地方聯合で、これを中心に八つの地方聯合が参加して成立した。ＣＮＴの目的はアナキズムで、産業別全国聯合は否定され、地方別シンジゲートが組織された。このことはアナ系闘争の方法に密着していることを示している。1917年ロシア革命に対し、ＣＮＴからカタロニアのニンと、アラゴンのマウリン一派がソ連に行き、ＣＮＴへは許諾なく権限もないのにＣＮＴを勝手に第三インタに加入させたが、1921年クロンスタット水兵の反逆で、バークマンやゴールドマンのレポートがスペインにも送られ、ペスターニャ等がソヴェトに行きその実体を知りニンやマウリンの越権行為は否定され、かれらは脱党し、左翼共産党を結成したが少数で影響力はなかった（1932）。間もなく、コミンテルンの命令で、スペイン共産党はニンを捕えて秘密に殺害し、マウリンはフランコ政権にひきわたされた（ブレナン）。

二　延島英一、石川三四郎と「自聯」へのサンジカリズムの浸透

「1930年代におけるアナキズム革命運動」に関係するサンジカリズム問題の発祥は、東京印刷工聯合の機関誌「印刷工聯合」大正十三

年1924一月第八号所載の延島筆「運動方針の改革」なる論文の掲載から端を発した（綿引邦農夫による）。

延島の前記論文は具体的内容はなかったが、当時、印刷工組合は正信会（主として新聞工）、信友会（主として欧文工）など、労働組合の名称もなく、信友会の場合は会員の性格も右から左まで混沌たる状況で、こうした現状に対し近代的労働組合化し、大企業化しつつあった印刷産業の趨勢に対抗すべきであると主張したものであった。印刷工組合は、大正十一年1922に、コミンテルン？の招請で、渡辺幸平、北浦千太郎（のちに入党）、水沼熊、小林、吉田の五名が、岩佐作太郎も関与（綿引）、約二年間、留ソし大正十三年1924に帰国した。これよりさき大正九年 1920 には、アレクサンドル・ベルクマンやエマ・ゴールドマンが一月にはロシアに到着、クロンスタットの反逆、そのほかロシアの実状を見、レニン政府に抗議して、第三回コミンテルン（1921年七月）のあと、ヴォーリン、マクシモフ、ムラチニイなどを救出（国外退去）1922 一月、かれ等は在外ロシアアナキストの組織をつくり、ソヴェトの実体を国際的に曝露、反ソ運動を展開したのであるが、渡辺等がモスクワに到着した時は、すでにロシア・アナキストの運動は蹂躙されており、また、渡辺等も急進的労働組合代表として派遣されたのであろうから、恐らく何がしの教育をうけて1924年には、帰日して印刷工組合に復帰したのであろう。

延島は、フランスの労働運動を研究し、アミアン綱領によるアナルコ・サンジカリズムを信奉するに至り、かれはスペインのCNTのセグイやペスターニヤのように、思想的譲歩をしてもスペイン労働者総同盟UGTと合同し、全労働者階級をひとつに結成し、アナルコ・サンジカリズムの社会革命を行なうことを夢想し――昨年、一九七一年における労働戦線統一路線討議試案も「実践的労働組合主義」なる方向を担ぎ出した――、石川三四郎と握手した。彼のこの方針に賛成したのは、留露五人組中、渡辺幸平で、かれらは前項で述べたような労働者反対派の運動の経過などは、1921年の上半期にすでにレニンによって息の根を止められていたので、ソヴェト・サンジカリズムの命運には通じなかったのであろう。そうした経過のもとに、大正十三年1924四月二十三日、印刷工聯合の新しいアミアン綱領、規約草案を延島、渡辺の共同提案で第一回準備委員会に提出、形式的部分修正ののち、四月末の大会で可決され、日本におけるアミアン綱領がはじめて実現を見たのである。このように、サンジカリズム問題はアナルコ・サンジカリズムの先攻によって開幕したのである（注46）

（注46）最近、三田学会雑誌、第六十四巻第十第に小松隆二「全国労働組合自由聯合会小史」が発表されている。全国自聯の結成から、自協の分裂、その合同に至る簡明なる史稿で、ぜひ参照されたい。ただ、自聯、自協の合同などが、相沢等の日本無政府共産党ビューローの活動方針として決定され、そうした背景との連関はとりあげられていない憾みはある。

右の延島草案による可決された「全国印刷工聯合会綱領」は左記のとおりである。

「わが全国印刷工聯合会は資本家階級と労働者階級との間に共通の利害なるものの絶体に存せず、ただ両者の間に絶えざる利害の衝

突あるのみなるを自覚し、この意識の下に全国の印刷工業労働者を階級的に団結し、有力なる無産階級解放運動の一部たらんと欲するものである。

我々はこの主張に基づき団結を成すことによって、先ず個々の資本家に突貫し、部分部分の改革を獲得すると共に、現在の社会的不正が資本主義的組織、すなわち労力を商品として取り扱う制度に基礎を置くものなるが故に、これに代わるべき新しい協働的社会生活への道を拓かんとするものである。

さらに、わが全国印刷工聯合会は、労働者階級の力はその経済的団結であり、我々の目的はただその経済的行動によってのみ達成さるべきを確信する。そして労働者の経済的団結が政治的諸党派と関係することは単に内部的紛争を惹起するのみでその運動上有害無益なるが故に、わが印刷工聯合会は一切の政治的諸党派と無提携無関係を標榜する」（傍点は筆者）

以上の延島の主張が、どのように当時の経済情勢と関連したかを見よう。すでに、第一章で触れたように、第一次大戦後の経済恐慌のあと、大正十一年 1921 には労働運動は守勢期に入り、大正十一年末には日本共産党結成、同年夏、「前衛」誌上に政治闘争へのいわゆる「方向転換論」が掲載され、大正十二年九月大震災、九月十六日、大杉、野枝の虐殺、大正十三年 1924 三年には自由聯合系最大の組合であった機械労働組合（高山久蔵）が、サンジカリズム系から離脱し現実主義に転身した。

こうした客観的情勢に対して、延島が、思想を排除し、日常改良闘争を重視し、政治を組合に持込まず、大労働組合主義を夢想したことは、かれはそれがひとつの方向であると考えたからであろう。後述するように、石川三四郎は、恐慌時には労資の激突を避けて組合の温存を図るべきであるという現実主義的見解を示している（石川三四郎「サンジカリズムの話」）。

延島は印刷工聯合の質的編成のために、次の組合叢書を発行した。この三点のうち、最後の「自由聯合の話」は延島が関与しないものであり、もちろん、第一集の「サンジカリズムの話」に重点が置かれた。

一、石川三四郎「サンジカリズムの話」（資料8）大正四年 1925 八月二十七日全国印刷工聯合発行
二、石川三四郎「労働組合の話」大正十四年 1925 十二月、全国印刷工聯合発行
三、石川三四郎「自由聯合の話」昭和二年 1927 五月、全国印刷工聯合発行（注47）、（注48）。

（注47）石川三四郎の著述は大著「西洋社会運動史」昭和二年 1927 十二月、大鐙閣発行（戦後、学芸通信社、復刻版有）のほか「サンジカリズム」春秋社、大思想エンサイクロペジヤ第十八巻。

（注48）石川はパンフレット第三集「自由聯合の話」第十六頁第十項「網目式平面組織」なる用語を使用している。この用語はおそらくクロポトキンの著作からきているのではないかと思うが、出典についてふかく知らない。いずれにせよ網状組織はアナキズム組織論においては、きわめて一般に使用せられる用語で、また、石川は「協盟」Parti なる用語も常用している。

なお、このアナルコ・サンジカリズムに関し、黒色青年聯盟が「日本における革命の手段が、労働組合を芯としたところの集団行動である」と綱領にきめていたという所論をなす人がいる。それには論拠が示されており、黒聯の機関紙「黒色青年」第二号、大正十五年 1926、五月第二号に、無署名の「黒色行動と労働組合」の一文が掲載されており、上述引用された文が掲載されているのである。この一文はかなり長文なので省略するが、大意は右の引用趣旨に要約される。この所論から、当時の黒聯はアナルコ・サンジカリズムを支持していたと結論している。

しかし、黒聯掲載の右の一文がアナルコ・サンジカリズムを示しているかどうか、第一にその点に疑問があろう。アナルコ・サンジカリズムは、もっとアミアン体系を有している。

なお、当時の黒聯は結成といっても、ルーズで、綱領などといった鹿爪らしいものを審議したことはなかったと思う。署名人も次々と替わり、編集などもまわり持ちではなかったかと思う。かなり経過して黒聯がセクト化し中央集権的存在となってからのことは知らないが、第二号あたりは記憶はそうであるし、黒聯掲載文は全部無署名だったと思う。要するに当時は、アナもアナルコも何もかもが混在して、全体として闘争的であった。

そこで、再び、印刷工聯合に戻り、延島、渡辺、和田等の勢力も伸長したが、印刷工聯合につよい伝統を有する自由聯合派（綿引、布留川兄弟、伏下、梅本）の勢力も拮抗した。延島は表在的であったが、自由聯合系（アナ系労働組合）は底流として強力であった。

一方、労働運動全般としては、労働総同盟は分裂し、大正十四年 1925、五月、共産党の日本労働組合評議会が結成され、その活動は顕著だった。こうした客観情勢から、自由聯合系組合は、印刷工聯合を中心に、大正十五年 1926 五月二十四日、全国自聯が結成されたのである。而して、印刷工聯合の機関紙「印刷工聯合」は大正十五年五月、第三十六号をもって歴史を閉じ、同年 1926 六月号を全国自聯機関紙「自由聯合」第一号（発行人大塚貞三郎・現在は河野）として発行するに至った。

全国自聯の構成組合は、

関東労働組合自由聯合（埼玉小作人社を含む）
関西　〃　〃
中国　〃　〃
広島　〃　〃
函館　〃　〃
札幌　〃　〃

から成り、第一回全国大会において左記綱領が可決された（注49）

一、吾等は階級闘争を以て労働者、小作人解放運動の基調とする。二、吾等は一切の政治運動を排除し経済行動を主張する。三、吾等は産業組織による自由聯合主義を提唱し、中央集権主義を排除する。四、吾等は帝国主義的侵略に反対し、労働者階級の国際的侵略に反対し、労働者階級の国際的団結を標榜する。

（注49）綱領草案には印刷工聯合からは島津一郎、松田等が出席。右の綱領第一には、のちに自聯の分裂を招いた階級闘争の用語があり、第三項には産業別組織などの構想も見える（実現せず）。

この当時の底流においては、大正中期のように組合運動が、革命意識を伴わなかったのとは異って、一面ではソ連その他の社会革命、他面には、世界恐慌の一環として吾国における持続恐慌の影響下にあって、問題の解明の底流には、労働組合の次元から、解放運動の次元に意識、無意識にかかわらず基盤が置かれたことは注視すべきである。また、これまでにおいても、今後においてもアナルコ・サンジカリズムなる用語が出るが、この用語の要約した意味については第五章第一項で解説したので参照されたい。

前記の全国自聯第一回綱領は、昭和三年 1927 三月十七日の全国自聯第二回大会の統行大会（三月）で下記のように改定された。

「我等は自由聯合主義を以って労働者解放運動の基調とする」

しかし、問題はこれで片づいたのではなく、問題の発端は茲から発生した。単に機関紙面からみれば「自由聯合」第二号、大正十五年 1926 七月号には、まだ、延島の「フランスの現実主義的サンジカリスト、ペルティエについて」なるペルティエのアミアン綱領に関する解説が掲載されており、無署名の「労働組合の使命」なる題で、革命的サンジカリズムは、今日の労働者の生活条件の改良をはかるのが目的である、という趣旨の論文が掲載され、昭和二年 1927 十二月には、延島訳、チェルケゾフ「共産党宣言の種本」が刊行された。このあたりから自聯編集が反サンジカリズムに転じた。

この少し前、大正十五年 1926 八月、自由聯合にベルリン国際労働協会（アナルコ・サンジカリスト・インタ）から全国自聯宛の下記書翰が訳載（山鹿）された。それは、

伯林国際労働協会は、アムステルダム国際労働同盟、モスコウ赤色労働組合インタに対し、伊太利の労働者を扶け、ファシズムに反撃するために、各国の労働者の組織的戦闘力による共同動作の計画についての提携の申し込みであったが、全国自聯は拒否した。

前述のように、この翌年、昭和二年 1927 十一月十九、二十日の両日、全国自聯第二回大会がひらかれ、のちに述べる経過によって議事未了に終わり、昭和三年 1928 三月、統行大会がひらかれ、全国自聯に大阪合成、東京自由、東京食糧、東京一般南葛、江東両支部等を除名し、事実上自由聯合派とサンジカリズム派とに分裂し、のちにサンジカリズム派は全国自協を結成、分裂を完成した。

これに先立ち、伯林国際労働協会（書記A・スーシー）は、自聯第二回大会（1927）に書翰をよせ、日本におけるアナキズム運動が、自由聯合とサンジカリズム派とに分裂しつつあることに対して見解を述べた（しかし、このスーシー書翰は自由聯合には掲載されなかった）。これに対し、自由聯合側は、スーシー書翰の内容が不当であるとして抗議の手紙を送ったのに対し、スーシーの回答が、昭和三年 1928 六月自由聯合第二十五号に転載された。

……当方の書信を犯しがたい指令と誤解しているが、国際労働協会（伯林）は自由聯合組織体であるから、書記局は何等権力をもつものではない。日本の同志の独立の感情を阻害する言葉があったとすれば遺憾である。協会は執行機関でも、指導機関でもない。そうした意味にとられるところがあればすべて徹回する。

貴下たちの雑誌エスペラント部分、および山鹿（泰二）たちの手紙から判断して、貴国におけるサンジカリズムとアナキズムの運動が不幸なる状態にあると結論し得た。そこでああした書翰を送った次第である。

ところが事実はアナキズムとマルキシズム、組合について言えば純粋なアナルコ・サンジカリズムと改良主義的日和見的サンジカリズムとの争いであることが明瞭となった。もし、吾々がこのことの真相を知っていたらああした書翰は送らなかったであろう（傍点は筆者）。

この書翰を読めば、すぐ気づく点は、吾々が問題としているのは、スーシーの言う純粋なアナルコ・サンジカリズムの排除である。もちろん、改良主義的、日和見主義的サンジカリズムというものが（例えば総同盟か）あればそれはもちろん排除するであろう。上記の点からみて、この書翰の筆者である伯林インタナショナル事務局のオーガスチン・スーシーと吾々の間には、非常に重要な錯誤がある。スーシーはアナルコ・サンジカリズムをアナ系集団と見ているが、吾々はそれはアナキズムとは別個なものであるというのが吾々の主張である。アナルコ・サンジカリズムとアナ系労働組合は別なものである。

すでに、マラテスタは「アナキズムとサンジカリズム」1907年の冒頭で〝労働運動に対する関係、位置の如何はアナキストにとって最大重要な問題のひとつである。これについては永い間の討議と経験にもかかわらず、今なお、充分な意見の一致を見ない〟と述べていることを見ても、問題は手軽な安直な問題ではないことが理解されよう。後掲資料（6）のように、1906年、アミアン綱領が可決された次年八月、アムステルダム国際アナキスト大会で、フランスのCGTのピエール・モナトとアミアン綱領について論争したものを、フリーダムに連載され、幸徳が訳出したもので、マラテスタの主張に同意する。

これと直接に関係はないが、スペインのCNT（労働組合聯合）は、シンジケートが地方別に組織され、全国を縦断する産別組織がない（1910）。そして、地方シンジケートは毎日曜日、地方の問題を討論するために大会をひらき、全住民が出席し、中世の自治

体の真の復活の感をあたえる。吾々は問題が、このような捉えかたで行なわれることが望ましい。スペインのシジケートは、非常に農青イズムに近接している。

マラテスタの書いた冊子の中に「農民に伍して」1884年の中に〝サンジカリスト（組合主義）とは、全く政府というものを廃止して、共産社会を組織する同じ目的の労働者が労働組合としての団結である〟（注50）というくだりがある。この表現は、前記の「アナキズムとサンジカリズム」と背馳するのではないかと思わせる記述である。しかし、マラテスタはたしかにバクニンの死後、バクニストの最後の大会1877年のベルン大会で「インタナショナルは排他的に労働者より成立すべき団体であるべきではない。社会革命は労働階級の解放を目的とするばかりでなく、一切の革命家をその旗の下に糾合すべきであり、イタリーはサンジカリズム（労働組合主義）より何ものをも期待するものでもなく、ド・バーブ（英）の推薦する労働組合は反動的であると述べている。

（注50）「農民に伍して」1884年は、小作人社木下茂訳となっているが、事実は学生アナキスト聯盟（A・C・聯盟）の榎本、相沢が訳し、出版は二見があたった。本冊子の出た1884年は、マラテスタ年譜によれば、バクニンの設立した国際労働協会ナポリ地方聯盟で活動していた。相沢によれば原文は独逸文であったことからみて、原本がこの通りかどうか疑惑がある。

マラテスタの書いた別の小冊子「選挙戦に際して」（執筆年次不明）では〝俺達が労働団体に入ったり…地域団体を作ったり…あらゆる種類の労働者の団体、消費組合や労働組合、こういうものがもとになって、宣伝の種子を蒔かなくちゃならない〟（第二十五頁）と述べている。

マラテスタは、労働組合とサンジカリズム（労働組合主義）とを区別して考え、労働組合を否定するような軽卒な態度は採っていない。

三　八太舟三の「サンジカリズムの検討」と自由聯合の分裂、問題点の発生

こうした段階（「サンジカリズムの検討」の発行は昭和二年1927十月三十日発行、全国自聯第二回大会は同年十一月十九、二十日、続行大会は昭和三年1928三月）において八太は自由聯合主義の理論的代表者のかたちで出現したのである。

延島、石川のアナルコ・サンジカリズムと自由聯合の初期における紛争の実体は、大正十五年1926十月五日発行の「自由聯合」第四、第五合併号に水沼辰夫が「関西の一同志へ」（本章末資料7）なる一文を書いている。この資料を通読されれば、当時の両者の現実的状況が鮮明となろう（注51）。

（注51）水沼は昭和四十年八月、脳軟化によって死去した。川崎市塚越三ノ四七二、日本アナキストクラブの機関紙「無政府主義運動」第五十二号（水沼辰夫追悼号）にかれの足跡は詳しい。島津一郎の「思い出」によれば、サンジカリズムとアナキズムとの対立問題について「階級闘争について」なる一文を書いて、自聯内の理論的混乱をふせいだことが述べられているが、資料入手ができなかった。

こうした戦線のさなかに、前記、八太の「サンジカリズムの検討」（資料5）が発行された（注52）

（注52）本書は八太の執筆であるが、出版については大塚貞三郎、梅本英三、宮崎晃が協力した。

八太は「サンジカリズムの検討」の執筆にあたって、マラテスタの「アナキズムとサンジカリズム」を参照していることは、そのことを自ら述べているので明らかであるし、クロポトキンの「サンジカリズムとアナキズム」をも参照したことが推測できる。しかし、要するに、八太の主張は〝サンジカリズムが一の体系、一つの思想でなく、単に労働運動の一傾向にすぎず、サンジカリズムは大部分の思想をマルクス主義の「階級闘争説と労働価値説」から借用し、一部をアナキズムの「少数者の創造的暴力」から借用しているという論点から、サンジカリズムをはげしく攻撃した。同じように、アナルコ・サンジカリズムを攻撃したマラテスタの「アナキズムとサンジカリズム」と比較すれば、全く隔絶したものがあることを察知するであろう。マラテスタは、労働者のかたわらに立って、かれの肩を叩いて、サンジカリズムの欠陥について語りかけている。たしかに、アミアン宣言においては、階級闘争といった言葉は使用されているが、それが直ちに「階級闘争説」といったマルクス史観の全的容認のひとつとして使用されたものか否か。「労働価値説」についても、明白な出典は示されていない。また、吾々が生活しているのは資本主義の中である。その中での日常闘争は、それ自体が革命運動でないことは自明の理である。それだからといって、日常闘争を放棄することは、決して肯定できない。

しかし、八太イズムはアナキズム運動に限りない影響を与えた。

全国自由聯合の第二回大会の内容、経過については「自由聯合」第十九号（昭和二年１９２７十二月十日発行）に詳報されている。同紙掲載の「第二回全国大会の経過」にしたがえば、この大会直前、関西自聯加盟の大阪合成労働組合が運動方針の相違を理由に、関西自聯、並びに全国自聯からの脱退を声明、これに対し関西自聯も合成労組が綱領規約に抵触したものと見なして除名するに至ったのであるが、合成労組は突然前言をひるがえして、全国自聯よりは脱退しない旨を発表、第二回大会へ出席することを大会に通告してきた。

大会準備委員会議長（延島英一）は大阪合成除名は全国自聯の綱領、規約からみて抵触せず、したがって合成の出席は承認すると発表したため、関西自聯はあくまで合成労働は綱領規約違反であり、もし大会が合成労働の着席をみとめる場合は関西自聯は同席を拒むことを決議して、大会に臨んだため、大会は開会を宣しただけで議事に入ることができなかった。

これに対し大会準備委員（渡辺幸平）は延島見解と全くひとしく合成の着席は阻止しえない、合成は関西自聯内における少数派団体として全国大会で意見の発表をなすのは至当であると主張した（延島、渡辺はサンジカリスト派）。

これに対し、関西自聯は大会準備委員会を論難し、合成労働が自由聯合主義そのものに背反し、左翼、中間派、右翼との共同戦線を提唱し反自由聯合戦術を主張しつつある事実を説明。合成労働側も関西自聯との運動方針の二大差異、合成脱退の原因の詳細なる説明があり、延島英一の関西自聯への書信も発表され、一切の情勢聴取が終わったが、すでに午後十一時を過ぎたので、第二日（二十日）午前十時、大会を再開、右の問題に対する自由聯合各組合の見解が発表され、それは次のような内容であった。

一、関西自聯の態度を正当とし合成の着席をみとめざるもの

東京一般労働組合（多数派）、常盤一般労働組合、横浜黒色一般労働組合、横浜印刷工組合

二、合成の自決退場を求むべしとするもの、上毛印刷工組合、東京印刷工組合

三、着席後、自決退場すべしとするもの、江東自由労働組合

四、着席を認むべしとするもの、東京食糧労働組合

五、保留、朝鮮自由労働組合

結果は右の通りであるが、少数意見側で多数意見にしたがってもよいとの申出もあり、結局、合成労働は除名退席することに決定をみたのであった。しかし、この紛擾によって時間が空費され時間がおそくなった結果、大会を延期することになり、同夜ひらかれた全国協議会で、来年三月、東京で第二回大会続行大会をひらくことが議決されたのである。

この第二回大会の経過を報道した「自由聯合」第19号には、綿引邦農夫の「自由聯合を昂揚せよ」と題する大会批判の記事がかかげられている。

綿引の主張するところはすこぶる多岐にわたっているので、ここに遺漏なく紹介することは不可能であるが、要するに、かれにしたがえば〝全国自聯は形態は労働組合だが、他のいわゆる評議会、総同盟、その他の狭義の組合とは違う。大阪合成労働が階級闘争とさかんに言っていたが、この階級闘争なるものは、現社会組織の範囲内で、労働者と資本家の利害の不一致による闘争の謂であるが、吾々の実際運動なるものはるかにこの領域を越えている。全国自聯を労働運動に押しこめるような態度では解放的闘争に至るものではない〟といった主張に要約できよう。この要旨で明かなように、組合主義と解放主義との全面対立であることが主張された。

上記の経過により、いわゆる続行大会が翌昭和三年１９２８十七、十八日の両日、東京においてひらかれた。

続行大会においての中心問題は綱領改訂問題であった。全国自聯綱領は本章第二項のなかで記述されているが、その第一条は、

一、吾等は階級闘争を以って労働者、小作人解放運動の基調とする。（第二以下省略）となっている。

これに対し東京印刷工組合（伏下六郎）は東印組合案として「我等は自由聯合主義を以って労働者農民解放運動の基調とする」を発表した。東京自由労働組合は「我等は階級闘争を以って労働者農民解放運動の基調とする」（第二項以下略）。ついで東京自由はこの趣旨説明のため斎藤孔、大沼渉、歌川伸、高田格を立てたが、第一日はこれで終わった。

第二日はさきの東京印刷工組合案綱領に関し、綿引邦農夫が、かれが「自由聯合」第19号に書いた前掲内容の発言を一層充実したかたちで主張した。しかし、東京自由は「自由聯合主義」は階級闘争をしてよいか悪いかと発言を遮り、納得せず、緊急動議と称して、かれらの前掲綱領案を読みあげ、朗読をおわるや、東京自由労働者組合、東京食糧労働組合（組合員三名残留）、東京一般労働組合江東支部、および南葛支部は一斉退場した。このあと東京一般（松本親敏）の動議で前記組合の除名を可決した。要するに「階級闘争を以って」か「自由聯合主義を以って」かの固執によって全国自聯は分裂するに至ったのである。

なお、この大会議事において望月桂が「農村問題は人間生活における根本的意味をもつものである。生きるためにことに自由聯合主義者は農村問題に関心せよ」という動議を出している。

右の続行大会の内容については「自由聯合」昭和三年１９２８四月十日発行第23号、並びに号外において詳述しており、梅本英三が「何故彼等を除名したか」を細説している。なお第二面に「自由聯合主義と階級闘争」なる論文を掲載しているが、端的には前掲の綿引の記述で要約されていると思うので省略する。

また、除名された大阪合成労動組合にかわって、関西自聯に、あたらしく黒色一般労働組合が結成された。その綱領は「我等は自由聯合主義を標榜し、経済的日常闘争を以って我等一般労働者解放の基調とする」と決定した。

吾々はこの全国自聯の問題に対し、除名ということばよりは分裂という表現を使用した。おそらく全国自聯の予想よりも遙に事態は深刻な様相を呈し初めたのではないか。

すでに続行大会の年、すなわち昭和三年（１９２８）五月には東京印刷工組合そのものが分裂作用をおこし、サンジカリスト派は東京印刷工聯合会（のちの関東出版産業労働組合を結成した。翌昭和四年（１９２９）七月には関東一般、関東金属、関東化学、京浜合成、前記の関東出版、自聯に残留していた東京一般の北部と城南支部が参加して関東自協（関東労働組合自由聯合協議会）を結成した。関西では大阪印刷工、大阪自総、関西金属、神戸合成などが自聯を脱会して関西自協を結成した。

而して、関東自協、関西自協、名古屋の中部黒色一般、新潟の全産業労働組合があつまって日本自協を結成して、機関紙「労働者新聞」を発刊した。昭和五年、日本自協は自聯全協と改称したが昭和六年には再び自協にかえった。そして、「自協」を支持する石川三四郎、近藤憲二らによるサンジカリズム理論誌「黒旗の下に」は十数号にわたって発行された。

一方、全国自聯は、機関紙「自由聯合」は組合の労働貴族でなく、奴隷労働を強いられている未組織労働大衆を対象とすべきである、として昭和三年１９２８九月、紙名を「自由聯合新聞」と改称し、すでに言及したように、昭和四年１９２９を通じ、農村の窮乏と、その動向に注視をはらったが、自聯は傘下の労働者を失い、アナキズムのパイプとなる労働者大衆とのつながりを喪失して、都市労働運動の衰退は蔽うべくもなかった。

吾々は、ここでアミアン大会で採択されたＣＧＴ綱領の要旨を石川三四郎訳から要約掲出する。

「ＣＧＴは一切の政党政派を離れ、雇主と雇人を消滅させるために戦うすべての労働者を団結する。

大会はこの宣言を以って、資本階級が労働階級に加えた精神的及び物質的の圧迫と搾取に対して叛逆する労働者の経済分野における階級闘争を承認するものとみなす。

大会はこの主張を次の諸点によって正確にする。

サンジカリズムは日日の要求に添う事業として、労働時間の短縮とか、賃銀の増額とか、即時的改良の実現によって労働者努力の調整、労働者幸福の増進を追求する。しかしながらかくの如き行動はサンジカリズムの事業の一部分にすぎない。サンジカリズムは総同盟罷工を以ってその活動の方法と認め、今日は反抗の団体である組合が、将来に於いて生産と分配との団体となり、社会改造の基礎となるべきものとみなす。

大会は、この日常的及び未来的の二重事業が、賃銀生活の地位より生ずるものであること、及びその地位は、哲学的政治的の意見或は傾向の如何に拘らず、総ての労働者をして、サンジカ（組合）という須要な団体に加入するの義務を負わしめることを宣言する。その結果として大会は、同盟以外に於いて、各個人が哲学に、或は政治上の自己の意見に添う闘争に加入する絶対自由を認める。併し、それと同時に、その外部に発表する意見を組合内に注入せざらんことを要求する。（大思想エンサイクロペジア第19巻、石川三四郎「サンジカリズム」春秋社）　―傍点筆者―

１９０５年時代に於けるクロポトキンの「パンと自由」運動については、既に述べたが、バクニンの死後、バクニストのインタナショナルの最後の大会であった１８７７年の翌年１８７８年五月二十五日号が最終号となった。それは時計業の恐慌のために起ったストライキ基金のため購読の減少に起因した。ことばをかえて言えば、時計製造工業がジュラの家内工業の崩壊をまねき、かわってジュネーブの近代的企業組織がそれに替わり、過去七年の永きにわたってアナキズム運動を支援した機関紙、ジュラ地方聯合会報がつぶれたと言える。そして、一方では、ジュラにかわってクロポトキンは、ジュネーブで「レ・レボルテ」を発刊するに至った。そのとき、現

在の無政府共産主義が確立した。そうした趨勢からみて、クロポトキンが「あらゆる労働者の実際運動に対して、つねに熱心な関心を持ちつづけた（ネットラウ）」ことは当然のことであろう。

こうした経過が、クロポトキンのアナキズム運動の方論に変化を与えたであろうことは察するに困難ではないが、既述したように１９０５年ロシア革命に於ける動向も、吾々が、現在の段階では明白になし得ない。

１９１７年のロシア革命に於いて、六月頃にはレニンの指導する中央委員会が活動していたのに、革命的アナキズム運動はまだ存在しなかった。八月になってペトログラドにアナルコ・サンジカリストの「ゴロス・トルウダ」が生まれ、モスクワに移り日刊紙となり、モスクワには、アナキストの日刊紙「アナーキー」が活動していたが、ボルシェヴィキが権力をにぎると、１９１８年から１９年にかけて、凡ゆる方法で圧力をかけ、印刷所は解散され、全員が投獄された。１９２１年には同志は殺害された。そこで、当時、まだボルシェヴィキの権力が確立されず、まだ新労働者派の勢力がつよかったロシア南部（ウクライナなど）に、１９１８年末にはアナキスト・グループのほとんどが参加し、大ロシアの若干のグループも参加して汎ロシア・アナキスト・グループを結集した。それがナバト聯合である（ヴォリン・アヴリッチ）。

当時、ロシア・アナ系グループは三つに岐れ第一のグループがアナルコ・サンジカリストで労働者の組合、第二が自由コンミュン派で組合を重視しない、第三が個人的アナキストで、スチルネリアン。ナバト聯合はこの三つをひとつの聯合体として組成しようとする努力をこころみ（ヴォーリン）ながら、当面する現実問題には一致して当ろうとした。吾々は茲に重大な問題点の発生に直面するのである。「ゴロス・トルウダ」は、闘争の手段に於いては反国家主義、経済に於いては労働組合の管理、政治的には聯合主義、当面の目標を地方工場委員会の設置においた。アナキストの側は組合の管理でなくコンミュンによる収奪と樹立であるべきであると対立した。八太は「サンジカリズムの検討」に於いて、ナバト聯合がサンジカリストと袂別したと述べているが、ナバト聯合そのものは上記のような組成であり、ナバト側が、戦線の合一のため、全アナルコサンジカリストのナバト聯合への参加をもとめた（実践はある場合、理論と必要上矛盾することはあるが、この場合は、アナルコ・サンジカリズムをアナ系労働組合に還元、ナバト聯合を農工合体コンミュン聯合に組織すべきであったであろう）のに対して全アナルコ派が聯合を拒否したのが事実であろう。吾々はこうした問題点の現実的存在の事実に対して、充分な関心を寄せることが必要であろうと考えるものである。勿論、ソ連の場合は、クロンスタットの直後、レニンは労働者反対派の組合論を一夜にして一掃したので、サンジカリズムは崩壊した。勿論、ナバート聯合その他多数のアナキスト、アナルコ・サンジカリストが銃殺されたことは言うまでもない。マフノ（ナバト聯合とは密接に協同した）は負傷して疲れはて一年近くウクライナを彷徨した後、ルーマニアに出てパリに逃れた。**資料（5）**